

大阪商業大学学術情報リポジトリ

JGSS-2012のデータ分析による社会および個人生活 に対する意識の世代別検討

メタデータ	言語: ja 出版者: 日本版総合的社会調査共同研究拠点 大阪商業大学JGSS研究センター 公開日: 2019-06-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/674

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



JGSS-2012 のデータ分析による社会および個人生活に対する意識の世代別検討

大坪 寛子

慶應義塾大学社会学研究科

Views of Five Generations of Japanese People about the Societies
They Belong to and Their Personal Lives: An Analysis of JGSS-2012 Data

Hiroko OTSUBO

Graduate School of Human Relations

Keio University

The present study examined the differences among Japanese people from five generations about the societies they belong to and their personal lives. The following generations were included: “the first post-war generation” (born between 1932 and 1936), “the massive generation” (born between 1946 and 1950), “the new species of generation” (born between 1960 and 1964), “the massive generation junior” (born between 1974 and 1978), and “the new species of generation junior” (born between 1986 and 1990). JGSS-2012 data were analyzed using analysis of variance (ANOVA) or cross tabulation and chi-square test. Results showed the following differences among different generations: the older generations invested more trust in their neighborhood community; members of the youngest generation were the most suspicious of police, TV, and people in general; and members of the new species of generation were the least satisfied with their personal lives.

Key Words: JGSS, generation, views about the societies and the personal lives

本研究は、JGSS-2012 のデータを用い、社会および個人生活に対する意識について世代別に検討した。検討した項目は、社会に対する意識として、信頼という観点から、居住する地域社会、公共の組織、社会一般に対する信頼の程度、また、個人生活については、経済的側面、親密な他者との関係、社会からの受容、余暇生活や健康状態の満足度、将来への希望、総合的評価としての幸福感などについてである。世代には、第一戦後世代（生年 1932-1936 年）、団塊世代（1946-1950 年）、新人類世代（1960-1964 年）、団塊ジュニア世代（1974-1978 年）、新人類ジュニア世代（1986-1990 年）の 5 世代を設定し、分析には一元配置の分散分析、またはクロス集計とカイ二乗検定、また、幸福感の影響要因については重回帰分析を用いた。その結果、第一戦後世代と団塊世代は地域社会に対する信頼が高く、新人類ジュニア世代は低いこと、個人生活のさまざまな側面で新人類世代の不満が最も高く、そうした要因が作用している幸福感も低いことなどが明らかになった。

キーワード：JGSS、世代、社会および個人生活への意識

1. 問題設定

近年の社会の変化はめまぐるしい。たとえば、今や社会全体に深く浸透したインターネットも、総務省の「通信利用動向調査」によると(<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/statistics/statistics05.html>)、最も古いデータである 1997 年末には、従業者 100 人以上の企業での普及率は 68.2%、世帯普及率は 6.4%であったが、本稿執筆時の最新データである 2012 年末には、企業は 99.1%、世帯では 86.2%となっており、この 15 年間に急速に普及し、我々の社会や暮らしを大きく変えたということになる。

このように変化の激しい時代では、その社会に適応するための知識や考え方、行動が、短期的に変化する。社会の変化に応じて、学校教育での教育内容も社会の仕組みも、短い周期で変化していくため、どの時代に教育を受け、主にどのような時代に社会経験を積んできたかによって、知識や考え方が異なってくるのは当然のこととも言えよう。同じ日本社会の今を生き、同じ時代の変化を受けている者同士であっても、社会の見え方や個人生活に対する感じ方は、学校教育を受けた時代や、社会の中で経験を積んできた時代によって、つまり大まかには年齢によって、異なっているに違いない。

こうした関心は、すでに 60 年以上も前に、産業構造が変化しつつあるアメリカ社会の中で、アメリカ人の社会的性格の変化に注目した Riesman (1961、ただし初版は 1950) と重なる部分がある。Riesman は、アメリカ社会がサービス産業中心の消費社会へと変貌しつつある過程において、アメリカ人の同調性の主要原理が、個人が内面化した社会の普遍的価値を志向する「内部指向型」から、同時代を生きる他者の評価に敏感な「他人指向型」に変化しつつあると述べた。Riesman の指摘は実証データに基づいたものではないが、社会の変化の過程が人間の基本的な考え方に変化を及ぼすという指摘は示唆的である。数十年遅れてアメリカと同じように消費社会を進展させてきた戦後の日本でも、Riesman が指摘したように、こうした社会の変化の過程が日本人の基本的な考え方に次第に変化を及ぼしてきたとの仮説も成り立つであろう。

そこで本研究では、いくつかの出生コホートを抽出し、社会や個人生活についての意識を比較することで、コホート間で違いがあるのか、あるならばどのような点に違いがあるのかを探索的に検討することにした。出生コホートの比較に注目したのは、出生コホートの違いはすなわち、学校教育を受けた時代および社会経験を積んだ時代の違いと重なるからである。こうした経験から得た知識や考え方は、時代が変化しても部分的には残存するであろうから、出生コホートによる分析によって、横断的調査であっても、社会の変化しつつある過程を、部分的にはあるが捉えることも可能となるかもしれないと考えた。

出生コホートの抽出にあたっては、河野 (2010) による区分を参考にした。河野は、1973 年から 2008 年までの 35 年間に 5 年ごとに行われてきた NHK「日本人の意識調査」のデータに基づき、回答者の生年を 5 年きざみにした各出生コホートの類似性の高い群をまとめ、現代の日本人を 6 つの世代、すなわち「戦争世代」(生年が 1928 年以前)、「第一戦後世代」(1929 年から 1943 年)、「団塊世代」(1944 年から 1953 年)、「新人類世代」(1954 年から 1968 年)、「団塊ジュニア世代」(1969 年から 1983 年)、「新人類ジュニア世代」(1984 年以降)に区分した。河野によると、日本人の意識は「伝統志向－伝統離脱」の次元と「あそび志向－まじめ志向」の次元の 2 次元構造で捉えられ、各世代の意識は、時代の変化とともに多少は変化しつつも、35 年が経過してもなお「世代」としての一定のまとまりを保ち続けているという。この河野の世代区分を利用して、日本とその関係国のイメージを検討した大坪 (2011) は、こうした国家や国民イメージにも世代による差が見られ、たとえば団塊ジュニア世代は、中国人や韓国人に対して「自己主張が強い」など情動的なイメージを、他の世代に比べてより強く抱いていることを見出している。

なお、本研究は特定の出生コホート間のコホート分析ではあるが、河野に従って、抽出した特定コホートを「世代」と表記し、その名称も従った。「世代」による分析と称しているが、加齢による年齢効果とは区別して特定の世代の特性を析出した「世代効果」を見出そうとするものではなく、年齢効果も含めたコホート間の違いを検討するものである。

ここで検討する社会に対する意識は、信頼という観点から、最も身近な近隣社会、社会の中で中核

的機能を担う公共的な機関や組織、そして社会を構成する人一般に対して、どの程度信頼できるのかを問うことによって分析する。信頼に注目したのは、日本社会も伝統的な集団主義的原理で「安心」を得ようとする社会から一般的信頼に基づいた社会に変化することが求められると、時代の変化に応じた変化を山岸（2008）が主張しているからである。Yamagishi & Yamagishi（1994）が一連の質問群の中で検討した一般的信頼について、本調査でもたずねた。また、個人生活に対する意識では、その諸側面についての意識をたずねた後に、そうした要因と幸福感との関係について検討した。これは、古市（2011）が、現代の若者は、年齢が上の世代が思うほどには不幸とは感じていないと述べていることを参考に、幸福感に寄与する要因が世代間で異なる可能性があると考えたからである。

2. 方法

分析に使用したのは JGSS-2012 のデータである。本調査は、層化二段無作為抽出法によって抽出された日本全国に在住する 20 歳から 89 歳の男女 9,000 人を対象に、2012 年 2 月から 4 月に実施された。ただし、調査票は、一部が共通の質問項目から成る A 票と B 票の 2 種類が使用され、対象者としてそれぞれ 4,500 人が振り分けられた。本研究で分析対象とした質問項目の中には、A 票・B 票共通のものと A 票のみのものが含まれている。A 票・B 票共通の質問項目については、回答者数が A 票のみの質問項目の場合のほぼ倍となっているが、本研究では、いずれの質問についても、すべての回答者を対象とした。なお、A 票の回収率は 59.1% で有効回答数は 2,332、B 票の回収率は 58.8% で有効回答数は 2,335 であった。

本研究では、まず、社会に対する意識について、「信頼」を軸に、①居住している地域社会に対する信頼、②社会の中核的な公共的機関・組織に対する信頼、③社会一般に対する信頼、の 3 つについてたずねた。次に個人生活に対する意識については、①経済的側面に対する意識、②親密な他者との関係に対する満足度、③社会からの受容に対する意識、④余暇の過ごし方および健康状態に対する満足度、⑤将来への希望に対する意識、についてたずねた。いずれも質問項目の具体的な内容については、以下の節で述べる。そして、「幸福感」を個人生活に対する総合的な評価と捉えて、この測定結果を世代別に比較するとともに、これを従属変数として、①から⑤の要因を独立変数とした強制投入法による重回帰分析を世代別に行った。

本研究では、こうした意識を世代別に検討することを目的としているが、その「世代」として、河野（2010）の区分に従い、5 つの世代を設定した。その中でも、1932 年から 36 年生まれの出生コーホートの回答者（2011 年末の満年齢で 75 歳から 79 歳）を「第一戦後世代」、1946 年から 50 年生まれ（61 歳から 65 歳）を「団塊世代」、1960 年から 64 年生まれ（47 歳から 51 歳）を「新人類世代」、1974 年から 78 年生まれ（33 歳から 37 歳）を「団塊ジュニア世代」、1986 年から 1990 年生まれ（21 歳から 25 歳）を「新人類ジュニア世代」として、回答者の中から抽出した。A 票のみの場合と B 票も合わせた世代別回答者の数を表 1 に示す。

表 1 世代別回答者の性別構成

	第一戦後		団塊		新人類		団塊ジュニア		新人類ジュニア	
	A 票	A+B 票	A 票	A+B 票	A 票	A+B 票	A 票	A+B 票	A 票	A+B 票
男性	77	149	130	266	90	176	83	179	49	98
女性	80	167	143	292	103	193	108	218	56	112
計	157	316	273	558	193	369	191	397	105	210

世代による差を検討するための分析方法として、回答が比尺度および間隔尺度とみなせるものについては世代別に平均値を出し、一元配置の分散分析を行った。その後の検定では、等分散が仮定できるものについては Tukey の HSD 検定による多重比較を、等分散が仮定されないものについては、Welch

の近似法による検定と Dunnet の T3 による多重比較を行った。また、回答が名義尺度のものについては、世代別にクロス集計を行い、カイ二乗検定と残差分析を行った。なお、無回答者については、分析の対象から除外した。

3. 社会に対する意識についての結果

社会に対する意識として、ここでは信頼という観点から検討した。自分の居住している地域社会、社会の中核的な機能を担っている公共の機関や組織、そして社会を構成する人々に対し、どの程度信頼しているのかをたずねた質問群を分析した。

3.1 居住している地域社会に対する信頼

まず、社会の中でも最も身近で具体的に捉えることが可能な地域社会に対する信頼について、「近所の人は、お互いに気にかけている」および「近所の人は、私が困っていたら手助けしてくれる」という意見に対してどう思うかを、それぞれについて「よくあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの 5 件法でたずねた。信頼しているほど値が高くなるように変換し、両者の内的整合性について信頼性係数 (Cronbach の α) を出したところ、 $\alpha = 0.79$ と十分に高い値が出た。そこで両者の回答を合計した合成変数を作成し、「地域住民への信頼度」とした。その世代別平均値を算出し、一元配置の分散分析を行った結果が表 2 である。

表 2 地域住民への信頼度の世代別平均値 ($2 \leq M \leq 10$)

第一戦後 (n=148)	団塊 (n=270)	新人類 (n=190)	団塊 Jr. (n=191)	新人類 Jr. (n=105)	Welch
7.08 ^a	6.97 ^a	6.53 ^b	6.47 ^b	6.09 ^b	8.28***

同一のアルファベット記号が付されていないものの間に有意差あり ($p < .05$) $dF(4,380.07)$ *** $p < .001$

この結果からわかるように、どの世代でも「どちらともいえない」の midpoint 6 を上回り、不信感よりも信頼の方に傾いていたが、世代による差があり ($p < .001$)、下の世代になるにつれて、信頼度が直線状に下がっていた。Dunnet の T3 による多重比較では、団塊世代以上の世代と新人類世代以下の世代との間に有意差があり、上の世代の方が地域住民への信頼度が高かった。

本調査には、やや角度を変えた同様の設問があるため、確認のために分析したところ、同様の結果が得られた。東日本大震災 (2011 年 3 月 11 日発生) に関する一連の質問群の後に設定された「あなたの地域で自然災害が起こった場合、あなたの地域の人々は、お互いに協力して当面の危機を乗り切ることができると思いますか」という質問について、「強くそう思う」から「強くそう思わない」までの 7 件法で回答を求め、そう思うほど値が高くなるように変換した上で世代別に平均値を算出すると、世代間で差があった ($Welch(4,773.73) = 9.81, p < .001$)。最も高かったのは第一戦後世代 ($M = 5.17$) で、順に団塊世代 ($M = 5.12$)、新人類世代 ($M = 4.85$)、新人類ジュニア世代 ($M = 4.78$)、団塊ジュニア世代 ($M = 4.77$) であった。いずれの世代も midpoint の 4 よりも高く、信頼の方に傾いており、わずかに新人類ジュニア世代の方が団塊ジュニア世代よりも上回っていたものの、年齢が下の世代ほど地域社会への信頼度が下がる傾向は同じであった。多重比較の結果、やはり団塊世代以上の世代と新人類世代以下の世代との間に有意差があった。

これらの結果が示しているように、いずれの世代でも、居住している地域社会に対し、不信よりも信頼の方が勝っていたが、団塊世代以上の世代は、それより年齢が下の世代に比べ、より信頼度が高かった。こうした年配の世代は、ライフステージとして、典型的には職業生活も現役を引退し、生活圏は地域社会が中心となっているため、地域社会の中にしっかりと根を下ろし、その中に信頼し合えるような関係を築いている人が多いのだろう。

3.2 公共的機関・組織に対する信頼

社会の中で中枢的な機能を担っている主な公共的機関・組織に対する信頼を、「あなたはどれくらい信頼していますか」とたずね、「とても信頼している」「少しは信頼している」「ほとんど信頼していない」「わからない」の4件法で回答を求めた。

項目に設定したのは、中央官庁や警察、病院など、11の基幹的組織である。こうした組織の活動は市民からの信頼を前提としており、信頼されているのが当然であるため、本研究では不信感を抱く割合に注目した。4件法による回答のうち、程度の差はあれ信頼の方に傾いている「とても信頼している」と「少しは信頼している」を統合して「信頼している」とし、「ほとんど信頼していない」と「わからない」の3つのカテゴリーで世代別にクロス集計を行った。その中から、「ほとんど信頼していない」と回答した者の世代別割合(%)のみを示したものが表3である。カイ二乗検定の結果と、残差分析により有意水準5%未満で有意に多い／少ないものについても太字で示した。無回答者は分析対象から除外したが、その数は項目ごとに異なるため、分析対象者の数も項目ごとに異なる。表にはその中の最大値を記載した。

表3 主な社会的機関・組織に対して不信感を抱いている者の世代別割合(%)

	第一戦後 (n=149)	団塊 (n=269)	新人類 (n=193)	団塊 Jr. (n=191)	新人類 Jr. (n=105)	自由度	χ^2 値
中央官庁	25.7	36.2	35.8	41.3	30.5	8	14.08
自衛隊	9.0	8.9	6.7	7.4	11.4	8	6.15
警察	11.0	9.7	12.4	16.8	25.7	8	24.78**
裁判所	7.6	7.8	5.2	4.7	9.5	8	14.51
学校	8.8	9.5	7.8	12.1	14.3	8	16.17*
病院	2.7	3.7	5.7	6.3	5.7	8	6.60
金融機関	17.0	14.6	15.5	20.0	16.2	8	6.13
大企業	17.7	17.5	18.8	19.0	15.2	8	40.47***
労働組合	27.7	31.9	24.9	24.2	22.9	8	30.24***
新聞	6.7	6.3	10.9	7.3	13.3	8	7.93
テレビ	8.3	11.7	18.7	29.5	31.4	8	46.61***

太字は残差分析の結果有意に多い／少ないもの ($p<.05$) *** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

世代にかかわらず不信感を抱く割合が高かったのは「中央官庁」で、逆に低かったのは「病院」や「裁判所」であった。「自衛隊」や「新聞」も比較的低く、それぞれ「警察」や「テレビ」よりも信頼されていた。世代別で有意差があったのは「テレビ」「大企業」「労働組合」「警察」「学校」で、残差分析の結果、「テレビ」と「警察」に対する不信感は、団塊世代より上の世代で低かったのに対し、団塊ジュニア世代以降の若い世代は高く、特に新人類ジュニア世代は、テレビに対しては31%、警察に対しては26%と、不信感を抱く割合が有意に高かった。「学校」や「自衛隊」、「裁判所」や「新聞」に対しても、新人類ジュニア世代は5つの世代の中で最も不信感の割合が高く、こうした公共的な組織に対して懐疑的な態度を持っている傾向が見られたが、「労働組合」や「大企業」に対しては傾向が異なり、新人類ジュニア世代の不信感の割合は他の世代よりも低かった。労働組合に対する不信感は、団塊世代で有意に高かった。

3.3 社会一般に対する信頼

ここまで社会の中の具体的な組織や集合体に対する意識を見てきたが、ここでは抽象的に、社会を構成する人に対する一般的信頼について検討するために、「一般的に、人は信用できると思いますか。

それとも、人と付き合うときには、できるだけ用心したほうがよいと思いますか」とたずね、「ほとんどの場合、信用できる」「たいていは、信用できる」「たいていは、用心したほうがよい」「ほとんどの場合、用心したほうがよい」の4件法で回答を求めた設問を分析した。本研究では、程度の差はあれ信用できると考えるか用心したほうがよいと考えるかの2つのカテゴリーに結果を設定し直し、世代別にクロス集計してカイ二乗検定を行った。その結果を表4に示す。

表4 一般的信頼についての回答の世代別割合(%)

	第一戦後 (n=311)	団塊 (n=551)	新人類 (n=365)	団塊 Jr. (n=392)	新人類 Jr. (n=209)
信用できる	48.2	58.4	54.8	56.9	49.8
用心した方がよい	51.8	41.6	45.2	43.1	50.2

太字は残差分析の結果有意に多い／少ないもの ($p<.05$) $\chi^2=11.75$, $df=4$, $p<.05$

世代による差は有意で ($p<.05$)、残差分析の結果、年齢が上の2つの世代、第一戦後世代と団塊世代との間で大きな違いが見られた。「信用できる」との回答は、第一戦後世代では48.2%と他の世代に比べて有意に低かったのに対し、団塊世代では58.4%と有意に高かった。本研究での団塊世代は61歳から65歳で、「前期高齢者」と呼ばれる年齢に差しかかりつつあるが、75歳から79歳の「後期高齢者」である第一戦後世代よりも、また、51歳以下の新人類世代や団塊ジュニア世代よりも、一般的信頼が高いことが示された。21歳から25歳の最も若い新人類ジュニア世代は、第一戦後世代に続いて一般的信頼が低かった。

一般的信頼の根底には基本的な人間観があると思われるため、参考までに人間観についてたずねた質問についても分析した。「人間の本性について、あなたはどのようにお考えですか」という質問に、「人間の本性は本来『悪』である」から「人間の本性は本来『善』である」の7点尺度で回答を求め、「善」とするほど値が高くなるように変換した上で無回答者を除いて世代別に平均値を算出し、一元配置の分散分析を行った。

どの世代も中点の4を超え、人間の本性を「善」と捉える性善説の方に傾いていたが、世代間で差があり ($Welch(4,761.94)=19.00$, $p<.001$)、最も高かったのは第一戦後世代で ($M=4.82$)、団塊世代 ($M=4.76$)、新人類世代 ($M=4.46$)、団塊ジュニア世代 ($M=4.22$)、新人類ジュニア世代 ($M=4.05$)と、年齢が下がるほど直線状に下がっていた。若い世代ほど性善説に懐疑的な傾向が示された。一般的信頼についての質問では、第一戦後世代に続いて新人類ジュニア世代の用心深さが示されたが、人間観については両世代で全く異なっていた。第一戦後世代は、用心深くとも人間の本性に対する信頼は失っていないのに対し、新人類ジュニア世代は、人間の本性に対する懐疑心からの用心深さであることが示唆された。

4. 個人生活に対する意識

次に個人生活の諸側面に対する意識を、経済的側面、親密な他者との関係、社会からの受容、余暇生活、健康状態、将来への希望についてたずねた質問群の結果を分析することで検討した。また、こうした諸側面の総合的な評価が「幸福感」であると捉え、この測定結果を世代別に検討するとともに、「幸福感」を従属変数とした重回帰分析を世代別に行い、ここで検討した個人生活に関する諸側面のどの要因が、どの程度影響を及ぼしているのかを検討した。分散分析の結果はまとめて表5に、重回帰分析の結果は表6に示した。

4.1 個人生活の経済的側面に対する意識

個人生活の経済的側面に対する意識を捉えるものとして、現在の家計状態への満足度と今後の生活

への経済的不安についての質問を分析対象とした。現在の家計状態の満足度については、どのくらい満足しているのかを「満足」から「不満」までの5点尺度で回答を求め、満足しているほど値が高くなるように変換した。また、今後の経済的不安については、「今後の生活について、経済的に不安を感じていますか」との質問で、「とても感じている」から「まったく感じていない」までの5件法で回答を求め、不安を感じているほど値が高くなるように設定した。

現在の家計状態への満足度については、世代間で平均値に有意差があった ($Welch(4,775.76)=12.29$, $p<.001$)。満足度が最も高かったのは第一戦後世代 ($M=3.50$) で、続いて新人類ジュニア世代 ($M=3.31$)、団塊世代 ($M=3.19$)、団塊ジュニア世代 ($M=3.06$) となり、最も低かったのは新人類世代 ($M=2.95$) で、中点の3を下回った。新人類世代の満足度は、団塊ジュニア世代を除く他の世代と比べて有意に低かった。

今後の経済的不安についても、世代間で平均値に有意差があり ($Welch(4,782.97)=8.85$, $p<.001$)、不安が高かったのは新人類世代 ($M=3.95$) と団塊ジュニア世代 ($M=3.90$) で、いずれも第一戦後世代 ($M=3.57$) や新人類ジュニア世代 ($M=3.62$) と有意差があった。

これらの結果を総合すると、個人生活の経済的な側面については、ほとんどが年金収入に頼っていると思われる第一戦後世代が、現在の家計状態の満足度も高く、かつ今後の経済的不安も低いということで、最も肯定的な意識を持っていることがうかがえた。これに続くのは最も若い新人類ジュニア世代であったが、これは、この世代がまだ20代前半で、経済的に親に依存している者も多いことが理由として考えられよう。

逆に厳しい意識を持っていたのが新人類世代と団塊ジュニア世代で、両世代ともに現在の家計状態に対する満足度は低く、今後の経済的不安も大きかった。特に新人類世代の家計満足度は中点の3を下回り、不満の方に傾いていた。この両世代は、年齢的には職業生活における現役世代であるが、ライフステージとして、典型的には家庭に養育期間中にある子どもを抱えている段階であり、教育費などの支出で、なかなか経済的なゆとりが持てるまでには至らないのであろう。新人類世代は、社会人としてスタートした当初がバブル景気の頃であり、相対的剥奪感が不満の一因となっているのかもしれない。

4.2 親密な他者との関係に対する満足度

親密な他者との関係に対する意識として、家族の構成員との関係を包括するものとして家庭生活、そして友人関係、また、配偶者がいる場合には配偶者との関係について、満足度でたずねた質問を分析した。5点尺度で求めた回答を、満足度が高いほど値が高くなるように変換し、世代別に平均値を

表5 個人的生活の諸側面に対する各世代の意識 (平均値: $1 \leq M \leq 5$)

	第一戦後	団塊	新人類	団塊 Jr.	新人類 Jr.	有意差
家計満足度	3.50 ^a	3.19 ^b	2.95 ^c	3.06 ^{b,c,d}	3.31 ^{a,b,d}	***
経済的不安	3.57 ^a	3.77	3.95 ^b	3.90 ^b	3.62 ^a	***
家庭満足度	3.88 ^a	3.80 ^a	3.56 ^b	3.85 ^a	3.70	***
友人満足度	3.69	3.66	3.54 ^a	3.68	3.86 ^b	**
配偶者満足度	3.98 ^a	3.93 ^a	3.66 ^b	4.04 ^a	4.29	***
社会からの受容意識 ($3 \leq M \leq 12$)	7.76	7.79	7.62	7.59	7.69	n.s.
反疎外意識	3.44 ^a	3.37 ^a	3.10 ^b	3.04 ^b	2.99 ^b	***
余暇満足度	3.68 ^a	3.55 ^{a,b}	3.34 ^c	3.46 ^{b,c,d}	3.61 ^{a,b,d}	***
健康満足度	3.28 ^a	3.47	3.28 ^a	3.58 ^b	3.60 ^b	***
将来の希望度 ($2 \leq M \leq 10$)	6.19 ^a	6.29 ^a	6.53 ^a	7.01 ^b	7.04 ^b	***
幸福感	4.03	3.93	3.75 ^a	4.07 ^b	3.82	**

同一のアルファベット記号が付されていないものの間に有意差あり ($p<.05$) *** $p<.001$, ** $p<.01$

算出して一元配置の分散分析を行った。

家庭生活の満足度については世代間で差があり ($F(4,1820)=6.15, p<.001$)、最も満足度が高かったのは第一戦後世代で ($M=3.88$)、続いて団塊ジュニア世代 ($M=3.85$)、団塊世代 ($M=3.80$)、新人類ジュニア世代 ($M=3.70$) となり、最も低かったのは新人類世代 ($M=3.56$) であった。多重比較を行ったところ、新人類世代は、新人類ジュニア世代を除く他の3世代と比べて有意に低かった。

友人関係の満足度についても、世代間で差が見られた ($Welch(4,774.05)=4.14, p<.01$)。最も満足度が高かったのは新人類ジュニア世代で ($M=3.86$)、第一戦後世代 ($M=3.69$)、団塊ジュニア世代 ($M=3.68$)、団塊世代 ($M=3.66$) と続き、ここでも最も低かったのは新人類世代 ($M=3.54$) であった。ただし有意差があったのは、最も満足度の高い新人類ジュニア世代と新人類世代の間のみであった。

配偶者との関係についての満足度も世代間で差があり ($F(4,1257)=6.38, p<.001$)、満足度が最も高かったのは、該当者は少なかったが新人類ジュニア世代 ($M=4.29$) で、続いて団塊ジュニア世代 ($M=4.04$)、第一戦後世代 ($M=3.98$)、団塊世代 ($M=3.93$) であった。ここでも最も低かったのは新人類世代 ($M=3.66$) で、他のいずれの世代と比べても有意に低かった (該当者数の少なかった新人類ジュニア世代とは有意傾向 $p<.1$)。

このように、親密な他者との関係について、最も満足度が低かったのが新人類世代であった。

4.3 社会からの受容に対する意識

人間は社会的動物であり、社会から受容されていると感じられるかどうか、個人の生活の質を左右する重要な要素と言えるであろう。そこで、そうした社会からの受容意識として、「周囲の人はおおむね私に好意的である」、「周囲の人からのけ者にされているように感じることもある」、「私の権利は社会から尊重されていると感じている」、「私は人々から社会に貢献できる人間だと認められている」との4つの質問群を分析した。

それぞれ「そう思う」から「そう思わない」までの4件法で求めた回答を、社会的受容が高いと感じるほど値が高くなるように変換し、質問群の内的整合性について信頼性係数 (Cronbach の α) を算出したところ、「周囲の人からのけ者にされているように感じることもある」との疎外意識の項目を削除すると、 $\alpha=0.74$ と一定の基準を満たす値が出た。そこで、疎外意識の項目を除いた3つの質問群の合計点から成る合成変数「社会からの受容意識」を作成し、世代別に平均値を算出して比較したところ、有意差は見られなかった ($Welch(4,383.34)=0.49, p=0.74, n.s.$)。いずれの世代も 7.59 から 7.79 の値で (中点は 7.5)、社会に受容されていると感じる方向にやや傾いていることが示された。

4.4 余暇の過ごし方および健康状態に対する満足度

続いて、やはり個人の生活の質を左右すると思われる余暇の過ごし方および健康状態に対する意識を、満足度について5点尺度で求めた質問を分析対象として検討した。満足度が高いほど値が高くなるように変換した上で、世代間で平均値を比較した。

余暇の過ごし方については、世代間で満足度に差があり ($F(4,1809)=6.142, p<.001$)、第一戦後世代の満足度が最も高く ($M=3.68$)、続いて新人類ジュニア世代 ($M=3.61$)、団塊世代 ($M=3.55$)、団塊ジュニア世代 ($M=3.46$) となり、最も満足度が低かったのは、ここでもまた新人類世代 ($M=3.34$) で、団塊ジュニア世代を除く他の3世代と有意差があった。新人類世代も団塊ジュニア世代も、ライフステージとして職場では現役の働き盛り、家庭では子どもの養育期間に当たるため、なかなか時間的ゆとりもなく、自分の余暇については満足できるような過ごし方ができないのかもしれない。

健康状態に対する満足度についても世代間で有意差があり ($Welch(4,774.89)=6.93, p<.001$)、最も高かったのは一番若い新人類ジュニア世代 ($M=3.60$) で、続いて団塊ジュニア世代 ($M=3.58$)、団塊世代 ($M=3.47$) で、第一戦後世代と新人類世代が最も低かった (ともに $M=3.28$)。若いほど健康状態への満足度が高いのは当然と言えるが、ここでも50歳前後の新人類世代は、60代前半の団塊世代よりも満足度が低く、75歳以上の第一戦後世代と同じ程度でしかなかった。

4.5 将来への希望

個人生活面で将来に対する肯定的な見通しを持てるかどうかの意識を、「私には将来の希望がもてず、物事がよい方向に行くとは考えられない」と「私が目指している目標は達成できないだろう」の2つの質問を使って分析した。それぞれ5件法で求めた回答を、将来に対して悲観的であるほど値が低くなるように変換し、信頼性係数(Cronbachの α)を算出したところ、 $\alpha=0.84$ と十分に高い値が得られたので、両者の得点を合計した合成変数「将来的希望度」を作成し、その平均値を世代間で比較した。

その結果、世代間で差が見られ($Welch(4,762.05)=16.93, p<.001$)、最も高かったのは新人類ジュニア世代($M=7.04$)で、続いて団塊ジュニア世代($M=7.01$)、新人類世代($M=6.58$)、団塊世代($M=6.28$)、第一戦後世代($M=6.19$)と、年齢が若いほど平均値が高く、将来に対して肯定的な意識を抱いていることが示された。新人類ジュニアと団塊ジュニアの両世代は、ともに他の3世代それぞれと有意差があった。

4.6 幸福感との関係

本研究では、個人生活のこうした諸側面の総合評価が「幸福感」であると捉え、「幸福感」を「あなたは、現在幸せですか」という質問で測定した結果を分析した。「幸せ」から「不幸せ」までの5点尺度で求めた回答を、「幸せ」と感じているほど値が高くなるように変換し、世代別に平均値を算出して比較すると、有意差があった($F(4,905)=3.68, p<.01$)。「幸福感」が最も高かったのは団塊ジュニア世代($M=4.07$)で、続いて第一戦後世代($M=4.03$)、団塊世代($M=3.93$)、新人類ジュニア世代($M=3.82$)で、最も低かったのは新人類世代($M=3.75$)であった。団塊ジュニア世代と新人類世代の間には有意差があった。

続いてこの節で検討した個人生活の諸側面に対する意識がどの程度影響を及ぼしているのかを検討するために、「幸福感」を従属変数とした重回帰分析を世代別に行った。具体的に独立変数として投入を試みたのは、経済的側面として「家計満足度」と「経済的不安」を反転させた「経済的不安なし」、親密な他者との関係に対する満足度としては、該当者が限られる「配偶者満足度」を除外した「家庭満足度」と「友人満足度」、また、社会からの受容については「社会からの受容意識」と「疎外意識」を反転させた「反疎外意識」、そして「余暇満足度」「健康満足度」「将来的希望度」の9つである。これに性別と就労および婚姻の有無のダミー変数を加えた。ただし、多重共線性の問題を考慮し、相関関係が強い($r \geq 0.5$)独立変数については、「家庭満足度」を優先する方針で他方を除外した。その結果、全世代を通して「余暇満足度」、団塊ジュニア世代を除いて「家計満足度」、第一戦後世代ではさらに「友人満足度」と「健康満足度」を除外した。その結果を表6に示す。

「幸福感」に有意に影響を及ぼしている要因として、どの世代にも共通していたのは「家庭満足度」であり、年齢にかかわらず、家庭に満足感を感じられるかどうかは、個人の幸福感を大きく左右することが示された。ただし、その影響力の大きさは、とりわけ第一戦後世代で大きく、年齢が下がるに従って小さくなる傾向が見られた。第一戦後世代は、「家庭満足度」が、「余暇満足度」ばかりでなく「家計満足度」「健康満足度」「友人満足度」とも相関関係が強く、家庭に満足感を感じている人は、余暇にも家計にも健康にも友人関係にも満足感を感じており、それが幸福感にもつながっていることが示された。「婚姻」と「健康満足度」は、団塊世代以下の世代に有意に影響を及ぼしており、「婚姻」については団塊ジュニア世代に、「健康満足度」については、不思議なことに最も若い新人類ジュニア世代に、最も影響力が大きかった。「将来的希望度」は新人類世代より下の世代に有意に影響を及ぼしており、年齢が下になるほど影響力が強かったが、当然の結果とも言えよう。

世代によって特徴も見られた。団塊ジュニア世代は「婚姻」の影響力が大きく、結婚していることが幸福感に大きく寄与することが示された。また、「友人満足度」や「社会からの受容意識」も有意な規定因であり、他の世代に比べて、幸福感に影響を及ぼす要因の数が多かった。就労していない方が幸福感を感じるなど、新人類世代とは逆の結果も見られた。また、新人類ジュニア世代については、

表 6 幸福感を従属変数とした重回帰分析（世代別）

	第一戦後 (n=129)	団塊 (n=243)	新人類 (n=183)	団塊 Jr. (n=183)	新人類 Jr. (n=105)
	標準偏回帰係数	標準偏回帰係数	標準偏回帰係数	標準偏回帰係数	標準偏回帰係数
性別（男=1、女=0）	0.112 †	-0.100*	-0.085	0.090 †	-0.038
就労（有=1、無=0）	0.059	0.027	0.132*	-0.110*	0.085
婚姻（有=1、無=0）	-0.023	0.114*	0.149**	0.229***	0.163 †
家計満足度	-	-	-	0.090	-
経済的不安なし	-0.018	-0.013	0.067	-0.102 †	0.011
家庭満足度	0.707***	0.520***	0.428***	0.324***	0.280**
友人満足度	-	0.094 †	0.024	0.114*	0.027
社会からの受容意識	0.133*	0.008	0.082	0.152**	-0.072
反疎外意識	-0.027	-0.015	0.035	-0.046	0.152 †
健康満足度	-	0.219***	0.180**	0.153**	0.315**
将来の希望度	-0.056	0.051	0.149**	0.183**	0.215*
切片	1.138	0.749	0.080	0.462	0.698
F 値	19.564***	31.079***	24.691***	29.653***	8.540***
自由度調整済み R ²	0.529	0.551	0.566	0.634	0.420

***p<.001, **p<.01, *p<.05, † p<.1

有意確率 10%の有意傾向ではあるものの、5つの世代の中で唯一、周囲からのけ者にされていると感じない「反疎外意識」が幸福感に影響を及ぼす傾向が見られた。

自由度調整済みの決定係数（R²）は、第一戦後世代から団塊ジュニア世代まで、0.529 から 0.634 と高く、このモデルの当てはまりがよいことがわかる。ただし、新人類ジュニア世代については R²=0.420 とやや低く、他の世代に比べてこのモデルの説明力が低いことを示している。新人類ジュニア世代の幸福感には、ここにはない別の要因が大きく作用しているのかもしれない。

5. 結果のまとめと考察

社会に対する意識と個人の生活に対する意識について、一部の側面のみを断片的にはあるが、世代別に検討してみると、世代による特徴が見られた。

年齢が上の団塊世代と第一戦後世代は、地域社会に対しても、警察や学校、テレビなどの公共的な組織に対しても、信頼の程度が若い世代よりも高かった。特に地域社会に対する信頼は、年齢が上の世代ほど高かったが、これは、典型的には、ライフステージにおいて職業生活の現役を終えるころまでには、持ち家を得るなどしてその地に定住し、地域社会を拠点とした生活を送ることになるため、若い世代と比べて地域の住民と信頼関係を築きやすい環境に、物理的にも心理的にも置かれているということが、背景として考えられよう。こうした背景要因は、加齢による年齢効果とも考えられる。第一戦後世代は、団塊世代に比べて、社会を構成する人に対する一般的信頼が低かったが、人間一般に対するそもそもの考え方は、本性は善であると考えられる性善説の方に、より傾いており、一般的信頼の低さは、近年の高齢者を狙った詐欺事件の多発などを受けて、むしろ用心した方がよいと「学習」した結果であるのかもしれない。

若い世代になるほど社会に対する信頼が低下する傾向が見られたが、最も警戒心が強かったのが、最も若い新人類ジュニア世代であった。地域社会への信頼だけでなく、警察やテレビといった組織に対する信頼も最も低かった。一般的な信頼についても第一戦後世代に次いで低く、しかも、第一戦後世代がそもそもの人間観は性善説に傾いていたのとは対照的に、人間観が5つの世代の中で最も中点

に近かった。新人類ジュニア世代の社会への不信感が、どのような要因から生まれているのかの検討は、今後の課題の一つである。また、地域社会に対する信頼の高さは、背景要因については加齢による年齢効果であろうと述べたが、これだけ社会に対して懐疑的な態度を持つ新人類ジュニア世代が、40年後、今の団塊世代の年齢に達したときに、地域社会中心の生活を送るようになったとしても、果たして団塊世代ほどに地域社会に対する信頼を感じるのかどうかは、やや疑問が残るところである。

また、個人生活に対する意識では、ここで検討したほとんどの側面で、新人類世代の不満が明らかになった。現在の家計状態についても、家庭や配偶者など親密な他者との関係についても、5つの世代の中で最も満足度が低かった。こうした意識の総合評価とも捉えることができる幸福感についても、同様に最も低かった。

対照的だったのは団塊ジュニア世代である。団塊ジュニア世代は、新人類世代と同じように、家計にも余暇にも満足度は低く、今後の経済的不安も強く感じていたにもかかわらず、5つの世代の中で最も幸福感を感じており、新人類世代と有意な差があった。両世代の違いは、団塊ジュニア世代は、経済的な不安があっても、社会から受容されているという意識や友人に対する満足度が高ければ幸福感が高まるのに対し、新人類世代では、そうした要因は幸福感に影響を与えないということである。新人類世代では就労している方が幸福感を感じるのに対し、団塊ジュニア世代では、就労していない方が幸福感を感じるという逆の結果も出た。

新人類ジュニア世代は、5つの世代の中で最もモデルの当てはまりが悪く、幸福感に影響を与える要因が、上の世代とは異なる可能性が考えられる。検討した要因の中でも、他の世代とは異なり、周囲からのけ者にされていると感じない「反疎外意識」の高さが幸福感に影響を与える傾向が見られた。どのような要因が新人類ジュニア世代の幸福感に影響を与えるのかの検討も、次なる課題である。要因によっては、幸福観が変化している可能性も考えられる。

本研究は、「世代」と称しながらも、出生コーホートの違いを検討したコーホート分析である。分析の結果、見られた差は、加齢による「年齢効果」であるのか、特定の世代にのみ特徴的に見られる「世代効果」であるのかを判別することはできない。長期的なデータの積み重ねが必要である。また、本研究は、社会および個人生活のいくつかの側面のみを断片的に分析したに過ぎない。特に個人生活については、幸福感に重大な影響を与えると思われるような要因、たとえば職業生活や学生生活に対する満足度や、「生きがい」と呼べるものの存在の有無、また、そうしたものに対する愛着の程度などについては測定しておらず、本研究の限界点と言えよう。新人類ジュニア世代の幸福感も、こうした要因と関連している可能性もある。さらに、「世代」の抽出に、河野の分類をさらに区切ったために、各世代、特に新人類ジュニア世代の分析対象者の数が少なくなってしまった。また、第一戦後世代については、75歳以上という高齢にもかかわらず、こうした調査にも協力できるほどに元気な人たちであるという点で、バイアスがあることに留意する必要があるだろう。こうした点も、本研究の限界点と言える。

[Acknowledgement]

日本版 General Social Surveys (JGSS) は、大阪商業大学 JGSS 研究センター（文部科学大臣認定日本版総合的社会調査共同研究拠点）が、東京大学社会科学研究所の協力を受けて実施している研究プロジェクトである。

[参考文献]

- 古市憲寿, 2011, 『絶望の国の幸福な若者たち』講談社.
- 河野啓, 2010, 「現代日本の世代と意識変化」NHK 放送文化研究所編『現代日本人の意識構造』日本放送出版協会.
- 大坪寛子, 2011, 「日本および関係国のナショナル・イメージについての世代別検討」『三田社會學』第 16 号: 52-72.

- Riesman, David, Glazer, Nathan, and Denney, Reuel, 1961, *The Lonely Crowd: A Study of the Changing American Character*, Yale University Press. (=加藤秀俊訳, 1964, 『孤独な群衆』 みすず書房) .
- 山岸俊男, 2008, 『日本の「安心」はなぜ、消えたのか—社会心理学から見た現代日本の問題点』 集英社インターナショナル.
- Yamagishi, Toshio, and Yamagishi, Midori, 1994, “Trust and commitment in the United States and Japan,” *Motivation and Emotion*, 18(2): 129–166.